

十六少年の引揚記

千葉県 岩田 一平

一 家族構成

私は、昭和四（一九二九）年四月二十九日に、現在は観光地として有名になっている北海道大雪山の麓、美瑛村で父長平、母よしの長男として生まれた。その後二人の妹ができたが上の妹は二歳で亡くなり、下の妹洋子と二人だけの兄妹となった。

父は、米の検査員を仕事としていたが、青年学校の指導員なども兼ねていた。家業の豆腐屋は母と母の妹の清江さんに任せ、小作の水田は住み込みの平石兄弟に作らせていた。これが当時の我が家の状況であった。

父の趣味は、銃剣術。この腕前は、毎年明治神宮の社前で行われる全国銃剣術大会で準優勝するぐらいの力を持っていた。このほかに田舎相撲の大関格、陸上競技万能の体質頑強であった。

二 少年期に満州へ移る

昭和十四年三月渡満することになったが、当時は世界恐慌発生から柳条湖、蘆溝橋事件をきっかけに、日中戦争へと拡大していく異常な時代であった。田舎では農業政策の不満から小作問題が盛り上がり、農業に携わる若者たちは嫌農気分支配されていた。折も折、時代の流れに国策は満州移民を打ち出し、疲弊にあえぐ農家の二男三男たちは開拓団として、また不景気に悩む商人たちが「満州へ満州へ」と歌曲に煽られるように渡満するようになった。

従前より進歩的な父は当然のように、家族は勿論、親類縁者、知人四十人ほどの人たちと共に奉天（瀋陽）の豪商田中氏を頼り、満蒙は大興安嶺の麓、興安総省ソ索倫に住むことになった。田中氏は豊吉叔父が関東軍の

主計将校であった際、軍の御用商人として関係を持っていたと聞いている。索倫での父は守備隊の御用達、国立種馬育成牧場への牧草納入、労働者の食糧確保の

製粉工場経営、その他種々請負を業とした。親類の人たちも、父の仕事を手伝いながら各々牛、羊、鶏等の育成、食堂の経営、学校、電話局、合作社に勤めた。私が国民学校四年生、妹洋子が一年生のときであり、全校生徒六十人ばかりで小さいが、校舎は煉瓦造りの立派な学校であった。当時の校長は松田進先生で、尊敬のできる方であった。

移住して間もなく、ノモンハン事件が勃発。索倫には一個中隊の守備隊がおり、また駅には列車に必要な給水塔があったため、ソ連軍飛行機による爆撃を受けた。初めての空爆を受けて、戦争は私たちの関係のない場所で行われるものと思っていたので、目前の現実には肝を潰した。小さいながらも校庭の隅に作られていた防空壕に入って、全員体を震わせながら爆撃の終わるのを待った。大した被害もなく済んだので、皆で喜び合ったのを思い出す。

この事件が始まったころ、ノモンハンに一番近い駅ハロンアルシャンに向かう兵隊が、軍馬、戦車などを載せて行くのを見送りに、日の丸の旗を振り何度か駅

頭に並んだ。しかし事件が進むにつれて、帰りの列車は数知れぬ白木の箱に変わったが、ただ黙祷して迎えるしかなかった。それもいつの間にか送り迎えもなくなってしまう、事件は日本軍の負け戦で終末を迎えることになった。軍の御用達をしていた関係から、いわゆるスプリング刀と言われる軍刀を二十振りくらいと、軍用犬を私の家に置いて行つたのを覚えている。軍用犬は「メリー」と名付け、第二次大戦まで家で飼っていた。支那服を着た人を見ると、牙を剥き出して食いついたものであった。もう一頭の「エス」は、おとなしい可愛い犬であった。

懐かしい索倫の生活は、四年生から六年生までのわずか三年間で、昭和十七年に遠く離れた旅順中学に行くことになるが、短い期間には楽しいことも多々あった。春夏には裏の川で泳いだり、大きな虹鱒など釣つたものだ。冬は、学校の体操時間には大抵スケートをやった。駅と町を分ける川が自然のスケートリンクになり、限らない長距離滑走を行うことができたが、通常は順番に回ってくる当番生が校庭に水を張り、ひと

ばん置けばできるリンクでスケートを楽しんだ。あるときには学校の裏山に登り、校庭にいる生徒と手旗信号の練習を行ったが、これも戦争の影響であった。お陰で、今でも手旗を振って会話ができる。

卒業時の校長は田中順平先生であったが、終戦時、悲惨な最期を遂げられたと聞いている。息子さんと年賀状のやり取りをしているが、その件ことは聞いていない。

三 旅順への旅立ち

由緒ある旅順中学に入学した昭和十七年四月は大東亜戦争勃発後、初めての一年生ということ当初から気合いを入れられ、また私たちもそれなりの覚悟を持って校門をくぐった。一歳年下で私の叔父にあたる平野忠一氏も、同学年で入校した。満州最古の学校を目指して各地から集まる学生は、全校生徒の約二割が親元を離れ寄宿舎生活に入ることになった。年齢は十二歳から十三歳の少年で、夜寝床に入ってから遠く離れた父母兄弟姉妹をしのびすすり泣く声が聞こえたもので、私も一週間ぐらいはその泣き声に釣られて泣い

たものであった。

一年生は、将来の志望によって軍人組、文科、理科、その他の四組に分けられ、私は軍人志望の組に入った。担任は北支戦線から帰還したばかりの若き中尉、横山俊男教官であった。毎日の朝礼に全校生徒が校庭に集合するのだが、全校どの組より常に一番早く整列すること、そして学業の成績も勿論ほかの組より優秀でなければならなかった。とりわけ教練の授業は誠に厳しく、軍隊に入ったのと同じかと思うほどであった。

二年生になっても同じ教官で、ある日学科が終わり音楽教室の掃除時間中に、十四、十五人でふざけて他の教官のあだ名を呼び合っていたところを、横山教官に咎められた。すぐ二列横隊に並ばせられ、「前列回れ右、向かい合った者同士で交互に殴れ」と言われた。適当に相手の顔を張り合っていると、「そんな殴り方では駄目だ。見本を見せる」と言い、前列回れ右、元の二列になったとたん、右の方から鉄拳が見舞われ、体の大きな張世泰君が二、三メートルほど吹っ飛ばされてしまった。驚いているうちに、二番目の森一生君

が同じように飛んで行った。三番目の私は、目が眩むと同時にわけが分からぬまま吹っ飛んだ。

また、ある休日に空き腹を抱えた四、五人の友人と八百屋に立ち寄り、リンゴを買うため店先にいたところに、折悪しく在郷軍人の教練を終えた同教官が通りかかり、学校前まで連れて行かれ、腰に帯びた軍刀で鞘ごと脳天を打たれ目を回した。一人は頭皮が裂けて出血するほどの衝撃を受けた。その後、教官室で革靴のまま正座させられ、一時間ほど説教された。今の時代では考えられない行為であった。

いろいろな教官に教育されたわけだが、横山教官が一番思い出深かった。しかし二年生の途中、再召集されたのか、いつの間にか学校から姿を消していた。戦後無事帰国され、当時のことを覚えておられたのか、謝りの手紙と共に、短冊を頂いた。今思えば不思議なことだが、当時は殴られることに大した抵抗を感じなかった。当たり前のことのように思ったものであった。

寄宿舎でも慣れぬ集団生活に戸惑い、上級生より注意小言を受ける明け暮れであった。特に食事作法、入

浴態度、上級生を見落として敬礼をしなかったという、いわゆる「欠礼」など礼儀に関する事など、些細なことを持ち出しては毎週土曜日夕食後、鉄拳を振るうのが定例であった。

しかし、つらいことばかりではなく楽しいことも多々あった。桜、桂、旭と三組に分かれた全校生徒による対抗運動会、大連からの夜行軍、美しい星が浦の夜景が忘れられない。

また毎年行われる学校と爾霊山の往復マラソンも全校生徒が参加するもので、途中女学生の応援があり、その場所だけはだれもが一生懸命走ったり、壮観な行事であった。関東州各中学校の各種対抗試合も懐かしい。剣道の試合は一回戦で敗れ、急いで相撲大会に出て国体優勝したこともあった。黄金台での遊泳、広瀬中佐で有名な旅順港内での遠泳、茶菓子を携えての観桜会、学期末試験期間の夜食、ここで支給される味噌うどんが美味しかった。春夏、そして冬休みの帰省は何物にも替えられない極上の楽しみであった。それはそれは、嬉しいことであった。それも二年生のころま

で、常勝の戦局は徐々に影を落とし、泥沼に足を取られるような負け戦に進むことになってきた。

昭和十九年、三年生になると、滑空班に入ってグライダーの訓練を受けていたが、級友たちと甘井子の飛行場建設に動員されることになった。双頭湾、羊頭湾などの対空監視、鉄道の犬釘、鶴嘴、針金などを製作している大連の信和鉄工など、交互に作業場を替えて動員が行われた。戦局が悪化するにつれて、同じ敷地にある中国学生と不穏な事態を起こすようになった。動員が激しくなるにつれ、勉強など一切行われることはなくなった。相変わらず腹が減って、友人と工場宿舎から抜け出し、煎餅ちえんびんを買いに走ったが、以前リンゴを買に行ったときのように問題になることはなかった。私たちが「撃ちてし止まん。鬼畜英米」と叫んでいたころ、戦局は連合軍がフランス北部のノルマンディに上陸し、欧州を制圧していた。

昭和二十年、四年生になったが、この年末妹の洋子が旅順高等女学校に、従弟の森永功君が中学校に入学

した。悲劇の序曲であった。本格的な学徒動員で、大連の満州化学工業に配属された。石炭がコークスに変わる行程を監視する作業についた。現場の高炉は高温のため上半身裸で、靴を履いた上に高下駄を突っ掛けるといふ姿で測定温度を確認、できあがると重機で押し出す。とても、傍に寄りつけるものではない。他の職場の状況は覚えていないが、皆汗水を流しながら一生懸命であった。B29が東京を空爆したニュースも聞き落ち着かぬ日々を過ごすうち、二、三度大連にも空爆があった。中国人の一部に、日本人を見る目が変わってきたのも、このころである。

四 父親との別れ

やがて昭和二十年八月十五日がくるのであるが、その十日ほど前の八月六日から三日間、父が満蒙の遠地から面会に来てくれた。「撫順まで牛を買いに来たので足を伸ばした」とのことであった。叔父忠一、従兄弟の功、妹の洋子と私は三日間の休暇をもらって、旅順の街を案内した。戦時体制一色の街は、国防色の服を着た男たち、もんぺ姿の女たちが行き交う殺風景さ

はいずれの街も同様であるが、乃木大将で有名な爾霊山、白玉山、旅順博物館、竣工間近の関東神宮などを巡ったかと思う。一夜旅順旅館で五人が泊まったのであるが、「戦況もますます激しくなり、予断を許さぬ状況である。これまでの戦で日本国が負けたことは一度もない、必ず勝つであろうから、それまで皆で頑張るのだ。中学を終えたら、ヨーロッパに行き医学の勉強をするのだ。その学費は既にできているから心配ない」と力強い言葉があった。後年ドイツを訪ねた際に、ある医学校の寄宿舎に立ち寄ったが、感慨無量であった。また最後に「万に一つということもある。もしものことがあれば、大連に従兄の長田鋏太郎という人がいる。そこを訪ねるのだ」と語り、「旅順は良い所だ。別荘でも作りたいが、そんな時勢でもなさそうだ」とも言っていた。

九日旅順を発ち、「公主嶺の農業学校にいる私の従弟である盛長浩君の所に立ち寄る」と言い元気に手を振って別れたが、これが父と私たちとの永遠の別れになるうとは、夢にも思わなかった。父が旅館で語った

「万一の場合」が間もなく訪れる運命を決めた一言であり、父が子に贈ってくれた人生最後のはなむけ餞に相違なかった。今にして、親子の絆の不思議さをこれほど強く感じたことはなかった。父は、それからわずか四日後の八月十二日には興安近くのウランホトで殺されたのである。

五 終戦、混乱の大連へ

昭和二十年八月十五日、いつもと変わらず工場で作業をしていたが、正午に重大な放送があると叫び、全員広場に集合した。天皇陛下の言葉を初めて聞いた。玉音ははつきりとは聞き取れなかったが、戦争に負けただけは漠然と理解できた。それから、中国人の労働者に襲撃されるというので、全員木銃を担いで宿舍に帰ったのが工場とのお別れで、翌日久し振りに中学の寄宿舎に戻った。何が何だか分からぬままに二、三日過ごしたのであるが、よく覚えていない。そのうち各動員先から皆が帰校したが、学校は閉鎖された。私たちも動揺していたが、各教官たちも大勢の

子供を預っており、大変な心境であったと思われる。

やがて寄宿舎生は、それぞれ各地に帰ることになった。列車の運行についての情報は不明だったので、結局各自の判断で親元に帰ることになった。だが十三〜十六歳の少年たちにとって、帰る所の様子が全く分からないのに自分の責任で帰れというのは、あまりにも苛酷な判断を強いることであった。私は女学校を訪ね妹を引き取り、忠一氏、功君と四人で索倫へ帰る決心をして、四年間苦楽を共にした学校、宿舍、友人たちに別れを告げ大連まで来たが、うわさの通り列車は動かず、大連駅構内は各地に移動しようとする人たちであふれかえっており、相変わらず先方の状況も分からず、途方に暮れた。やむを得ず、先に父から教えてもらった万一の場合の長田さんを訪ね、列車の動静を探ろうとしたが、その後、入手する情報は悪くなる一方であった。これが大連で一年半、戦争に負けたことのない庶民が悲哀と辛苦を重ね、また世話を掛けることとなった経緯である。

長田さん宅は大連市内の南にあたる静が浦地区に

あり、日塩会社に勤めていた長田さん夫妻と子供三人おぼさんの両親と妹たちの八人であった。同会社の地方から逃げて来たという小松さんの家族もおられ、そこに私たち四人が転がり込んだわけで、総勢十五人もの間でいっぱいになった。やがておぼさんの両親と妹さんは朝日広場の方に移られ、私と忠一氏はお隣の福島さん宅に夜泊まるだけということでお世話になった。優しく美しいおぼさんには随分可愛がってもらったが、おぼさんは兵隊に行っていてまだ帰っておられなかった。その後おぼさんは帰国して再婚されたので、シベリアで亡くなられたのかもしれない。

八月末のころだったと思うが、いよいよソ連軍が進駐して来た。大型戦車が数十台連なり、大地を揺るがせながら道路を掘り起こして進んで来るのに、驚嘆の目を見張ったものであった。この兵隊たちはシベリアに囚人として送られていた連中で、ドイツと戦ってきた乱暴な軍団だと聞いた。そのうち各家庭を襲い、時計、万年筆など、挙げ句の果て女を「ダワイ、ダワイ（よこせ）」と拳銃を突きつけた。女性たちが髪を切り

男装して街に出ると、背が低く腰が大きめに見えるので、すぐに分かってしまった。女性たちは次々大型トラックに乗せられ、どこかへ連れ去られ、帰って来た人はいかなかった。不安な毎日を余儀なくされ、住宅街は玄関扉をはじめ他の出入り口にも太い角材をX型に打ち付けて、軍靴のまま扉を蹴破って侵入して来るソ連兵を阻止した。長田家にも、ソ連兵が裏口を打ち破って侵入して来た。女たちをあわてて押入の床下に潜らせ、男たちが身体を殴り付けて抵抗すると、ようやく諦めて出て行った。その数日後には裏の青木さん宅に押し入り、新婚間もない奥さんを別室に連れ込んだ。軍靴で背中を蹴り上げられて倒れたご主人が、憤怒の形相すさまじく鴨居に掛けてあつた槍を構え「エイ、ヤーツ」と気合いもろともソ連兵めがけて突きを入れた。驚いた兵隊は、拳銃二発を撃ちながら外に逃げ出した。奥さんも同時に裏庭に飛び出し、難を避けることができた。弾は天井に当たっていた。また近所では、ご主人のいない母子の所にソ連兵ではなく中国人が物

取りに入り、膝に抱いた幼児なたを鉈で頭を一撃、母親も片腕を切られた。当時は、中国人の一部が日本人住宅を襲うことが多々あり、随分恐ろしいめに遭った。夜の住宅街を自衛するため、男たちが街角に不寝番として配置されたが、たまたま私が十五夜のすばらしい夜空を見て、故郷の父母をしのんでいると、いつの間にか五、六人の中国兵とみられる連中に囲まれ「何をしている。子供は早く家に帰って寝ろ」と着剣した三八銃でつつかれ、ズボンのポケットに入れてあつたハーモニカを取り上げられたことがあつた。

近くに第三中学校があり、しばらくの間通学したが事態はそれどころではなく、食の確保のため働かなければならない。いつともなく通学を取りやめ、忠一氏と毎朝、市の中央まで行き煙草、食パンを卸してもらい、静が浦の電停前でそれを売った。相手は日本人、中国人、ソ連軍の兵隊で、ときには酔っ払ったソ連兵に手作りの商売机をひっくり返されたり、煙草をただ取りされたこともあつた。当時中国は、国民党、ソ連、

共産党支配下とめまぐるしく変化していた。同じころ北満の方から逃げて来たという兵隊さんが豆腐を作っており、それを卸してもらった。早朝そして夕方、一斗缶に豆腐とオカラを天秤棒で前後に振り分けて担ぎ、忠一氏と二人で「トーフ、トーフにオカラ」と声を張り上げて歩き回った。当初の恥ずかしさもいつしか忘れ、小高い丘の上まで売りに行く。「何でこんなことをしなければならぬのか」涙を流しながらの十六歳であった。保育園を経営されていたおばさんに「学生の豆腐屋さん頑張つてね」と励まされ、毎回何丁か買ひ上げて下さった。大変有り難く、今も感謝している。後年、囲碁仲間の友人から「保育園のおばさんというのは俺の母親だ」と言われたのには全く驚いた。

そのころ妹と功君は当時十三歳、炊事、掃除、洗濯、子守など慣れない身でよく辛抱していた。かわいそうだと思うが、致し方なかった。長田家でも子供三人を抱え、衣類はじめ売れる物はすべて売り払い、食費に変わった。いわゆる竹の子生活であった。ある日庭に干してあった毛布を盗まれ、功君を殴ったことがあつ

た。今にして、許して欲しいと思っている。いずれの家庭でも同じであった。

北満の方から続々と南下して来た邦人からは悲惨な状況を聞けばかりで、日本に引き揚げる話もなく、悶々として豆腐売りを続けたが、大した売り上げにもならず、売れ残った豆腐を皆で食べるという日々であった。そのうちに、日塩会社の出先、塩田地である宮城子に行くことになった。塩田には、ソ連軍が一コ分隊ほどの兵隊で山積みされた塩を管理しており、私と忠一氏の仕事は、広い塩田に数カ所設置されている海水を汲み上げる小型ポンプに異常がないか見回ることであった。海と川の三角地帯に、一階が大型ポンプ室になっている二階建ての六畳一間に二人で住んだ。朝夕広い塩田をくまなく回って、ポンプの異常の有無を確認するのだが、慣れるに従って単調な毎日が退屈で仕方なかった。用水路の小川が傍にあり、鯿がたくさん上がってくるので、投網一振りですく五匹も獲れた。これを、ソ連軍から配給された主食の高梁とともに毎日腹いっぱい食べることができて、今までの空腹感が一

遍になくなった。バカ沙魚もたくさん釣れて、これを干物にして食べた。ソ連軍からの主食の高梁を月々麻袋に半分くらい、目方にして四十キログラムをもらっていたので大助かり。高梁をリングと物々交換して充分に食べることで栄養満点、ただ飲料水がないので一キロメートルばかり離れているソ連軍の駐屯地になっている中国人農家へ水をもらいに行った。一斗缶を天秤の前後に掛けて担ぎ運んで来るが、途中で水が跳ね落ち、到着時には半分ほどになるのが残念であった。

ある日、ソ連軍の隊長から若い兵隊と相撲を取れと言われ、久し振りに相撲を取り、ここぞとばかり五く六人を投げ飛ばし大いに溜飲を下げたことがあった。村の村長さんは早稲田大学出身で、「あなたたちは若いものだから、日本に帰ったらしつかり勉強してまた中国に戻り、中国人を指導しこの国のために働いて欲しい」と言われたのが、今でも頭から離れたことはない。

そのうちに各所のポンプが次々と盗難に遭い、最後にはちようど私が交代で大連に帰っていて忠一氏が一人で番をしていたとき、三八銃を持った兵隊らしい者

が私たちの住居下にある大型ポンプの強奪に来た。ただちに駐屯していたソ連兵に連絡に行ったようだが、何とも抵抗の様子がなく大変恐ろしかったと後で話していた。營城子ではいろいろなことがあったが、敗戦後一番気の休まったひとときであった。

やがてソ連軍が引揚げ、中国共産党の支配に変わり、以前より治安も良くなってきた。引揚げの話題も拡がり、邦人はその日のくるのを指折り数えるようになってきた。北満からの開拓団の方たちが主であるが、途中親兄弟などとの死別を余儀なくされ、幾多の修羅場をくぐって南下されて、大連へ、胡蘆島へと続々港のある所に集結していた。

六 いよいよ引揚げ

大連でも生活困窮者から逐次引揚げが始まり、私ら親と離れている子供たちにも割合早くに順番がきた。昭和二十二年二月、お世話になった長田さん家族、近所の方々とは別れ、ひと足早く功君は当日たまたま高熱のため次便に回ったが、着の身着のまま忠一、洋子、私の三人は大勢の人たちと共に大連港に集結した。引

揚船は遠州丸という古い貨物船であった。若い連中は荷物運びをさせられ、一番最後に船内の狭く仕切られた棚に入った。出航を知らせる銅鑼は、昭和十四年渡満の際に下関から釜山に向け出港のとき聞いて以来であり、今敗戦によって引き揚げる合図に聞くと、何とも納得のいかぬ複雑な思いであった。満蒙にあった父母や親戚は、無事日本に帰ったろうか。まだ北の方に残されているのではないだろうか、気が気ではなかった。

二三日で日本に着くと思っていたが、船が古いうえに、浮遊機雷を避けながらの航行で、五六日もかかった。航海中体調の悪い方も、早く故郷に帰りたいため無理をして、乗船された多くの人が亡くなられた。甲板に並べられた棺を見るのはつらかった。引揚船には十個の棺桶が用意されていたそうだが、それでも足りない場合は、致し方なく水葬するということであった。目前に日本を望みながらどんなに残念だったことか、心が痛んだ。荷物運搬などの手伝いをした者には、特別に両手いっぱい乾パンが支給され、スピーカー

から流れてくる田端義夫さんの「帰り船」を聞きながら食べたことも懐かしい。

「日本が見えたぞ！」と甲板から大声があがったのは、出航して何日目だったろう。甲板は人で埋まり、異常な興奮に包まれた。「バンザイ、バンザイ、日本に帰って来たぞ！」と涙を流し、肩を抱き合い絶叫する人たちでいっぱいであった。船は、五島列島を右に見て佐世保港に入った。栈橋を渡り、夢にまで見た感激の日本の土を踏んだ。間もなく待っていたのは消毒剤DDTで、頭から首、ズボンの中と、真っ白になるまで振りかけられたのは閉口した。パンツのゴムの回りにたむろする虱しらみも壊滅されるに至った。引揚者用の宿舎が何棟も建ち並び全員収容、入国手続きなどのため通常一週間程度足止めされるようだったが、ここで大事件が起こったのである。たまたま船に乗り合わせた人の中に、大連居住中に中国人を唆し、裕福と思われる日本人宅から財宝を強奪させた連中がいたのである。いわゆる人民裁判なるものが行われ、棟の出入

り口広場に真裸にされた男女八人が机の上に並ばされ、証人がこれを糾弾した。裁判長という人が、「この人間をどのように処分するか」と集まった人たちに諮ると、まだ興奮気味の群衆の中の五、六十人が声を揃えて、「故郷に帰すな」「殴り付けろ」「殺してしまえ」などと息巻き、凄惨な場と化していった。竹の棒、革のベルト、軍靴などで殴る蹴るの裁判が始まったのであった。敗戦による失意、苦勞、忍耐を重ねていた同胞を、同じ日本人が強奪したという怨念が一気に吹き出した形となった。私が見ていたとき、一人の男は机の下に突き落とされ、いろいろな道具で殴られていたが、革ベルトが動脈を切り血が飛び散った。しばらくけいれんを起こしていたが、やがて動かなくなった。片隅に移して次の被疑者の裁判にかかった。恐ろしくなつて宿舎に帰ろうとしたとき、警察官が入り口を封鎖し、広場に集まっていた者全員が別棟に移され監禁された上、刑事に調書を取られた。刑事は毎回引揚者による暴行事件があるが、死者が出たのは初めてだと驚いていた。十七歳の私はすぐ釈放されたが、この事件のた

め同船引揚者全員、さらに一週間ほど足止めを食つた。収容所で小遣い千円の支給があつたが、その半分は一山超えた農家で買ったサツマイモに化けてしまった。空腹はまだ続いていた。

佐世保を出た引揚者特別列車は、三千キロメートルに及ぶ北海道へと向かつた。途中広島の惨状を目の当たりにして、改めて敗戦国の哀れさを身に沁みて感じた。私たちが乗つた満員列車は、途中懐かしげに故郷の駅に降りていく人たちを残し、二日かかつて日本一長いホームと言われる青森駅に着いた。我先にと、走り出す乗客とともに青函連絡船に乗り換えた。何という船だつたらうか、残念ながら名前は見えていない。一個の荷物もない私たちは、魚臭漂う函館駅に立つた。ようやく故郷に帰つたようで心が躍つた。九時間もかかつて列車は旭川駅に入った。ときはまさに昭和二十二年二月二十二日、生涯忘れられない日である。迎えに来てくれた人たちがいた。父の兄久治伯父、父の弟豊吉叔父、母の弟正雄叔父であつたが、父と母の姿を見ることができなかった。伯父は「皆よく元気で

帰って来た。母さんは帰っているが長平の安否は分からないのか」と真つ先に尋ねられ、父がまだ帰って来ないことを察した。待合室で「腹が空いているだろう」と、片手で握れぬほど大きなお握りを渡されたのが、今も忘れられない。

先に引き揚げて、市の郊外永山村に住んでいた祖父平野家で、母と妹と三人、二年半振りの再会を喜んだ。

そのとき既に母は乳ガンに冒されており、「お父さんも帰らないし、私もこんな姿になってしまった」と切り取られた左胸を恥ずかしげもなく見せて嘆いたが、私たちは何とも言えなかった。戦争のせいにはしたくないけれど、寂然としなかった。

翌日一緒に帰った忠一氏を残し、妹と共に美瑛村の岩田本家に向かった。偶然にも当日、従姉の結婚式だった。親戚大勢の皆さんが集まるので、私たちが帰国したことに共にお祝いしたとのことであった。母たちと一緒に引き揚げた、父の姉盛長ふさ伯母もいて、「何で功を連れて帰ってくれなかった」と私が責められたのがつらかった。「功君は当日高熱を出したため残念

だったが、次便で間違いなく帰るから安心して」と許しを請うた。親としては当然な感情だと思った。それから間もなく、功君は長田家の家族と共に舞鶴港に引き揚げて来て、富山県魚津に落ち着いたところにふさ伯母が迎えに行ったのは、言うまでもないことであった。

そのうちに妹と共に本家に住むようになったが母の症状は進み、再会を喜んだ母子であったが、同年五月十三日還らぬ人となった。前日私と妹を枕辺に寄せて、「せっかくお前たちと会えたのに、お父さんが帰って来ない。悲しいことだが私の命も長くない。これからどんなつらいことが起こってくるか分からないが、二人で仲良く助け合って生きて行くんだよ」と黒紫色に腫れ上がった両腕を差し出して、私たちの手を握った。再会わずか二カ月後、三十九年間の短く寂しい生涯であった。母も一生懸命生きて、私たちを一人寂しく待っていたのであった。ここでも親子の絆を強く感じ、妹と二人して一晩泣き明かした。

久治伯父の本家も、引き揚げて来た妹弟たち数家族

の面倒を一時に見ることとなり、想像以上に大変なことであった。私たちは従兄弟の良和さんと一年間慣れない田植え、草取り、稲刈り、老知安別での畑仕事、冬は雪山に入り木工所に出す木を切り倒し、不要な枝など切り落として少々の薪を得た。また鮎作りをやっていた豊吉叔父の所で、従弟の浩さんと手伝いに行つたこともあつた。

年の豊作を祝う村祭りには、若くて美しい娘さんたちの踊りがひととき印象に残つた。村で田舎大閤を張つていた私が、近村で行われる田舎相撲と呼ばれ、年寄りの家でご馳走になつたことも懐かしい。

七 再度故郷を去る

昭和二十三年も父は還らず、母の一周忌近い春、渡満の際お世話になつた田中さんが大和郡山に帰国され、商売をされているのを聞いた。将来を考え悶々としていた最中であつたので、十五歳の妹一人を残して再び故郷を離れることになつた。「必ず迎えに来るから、それまで元気で待っていて欲しい」と寂しい別れをして北海道を離れた。

関西本線の伊賀上野で列車警察官の荷物検査を受け、伯父にもらつた軍足二本に入れた貴重な白米を取り上げられた。当時食糧、衣料は統制品で、大変うるさかつた。

田中商店に落ち着いたが、あらゆる品物が統制されていた時代で、商売といえげ用品を扱うことであつた。あるとき、東京世田谷にある同業者に、行李いっぱい詰めた靴下を手荷物として届けるということがあつた。どこの駅だつたか忘れたが、またもや警察官に見付かり、世田谷署に一晚拘留された覚えがある。翌日業者の方が引き取りに来られ、ようやく釈放された。靴下は勿論没収されてしまつた。

田中さんの弟さんが夜学で大阪の専門学校に通つていたので、私も是非勉強したいと型破りの入学願書を出して、同校に通わせてもらうようになった。中学校時代何の勉強もしておらず、入学願書には「これこれしかじかの事情で、情けないが全く勉強していない。これからは知識が必要であり、勉強したい。是非入学を許可して頂きたい」と、自書した願書に小指を切り

血判を押して提出したのである。受け取った学校当局も、異常な入学願書に驚いたことと思つた。

そのうち、同市内にある靴下工場にお世話になることになった。北海道から出て来て一年ほどになり、約束通り一人の妹を大和郡山に呼び寄せることができるようになった。美瑛村まで迎えに行った。これも皆さんのお陰であり、深く感謝している。妹は靴下工場の女子工員さんたちと一緒に働くことになり、私は靴下製造器の整備や大阪の問屋に荷を届けるという仕事をしながら、かろうじて夜学を卒業した。妹としてはどんなにか学校に行きたかつたらうかと、想像するに余るものがあつた。やがて二人で大阪に八畳一室の貸間を見付け、初めて兄妹水入らずの生活をするようになった。やがて私は会計事務所に勤め、妹は御堂筋の商店で働くことになった。

大阪の生活も短く、熊本から上京された長田さんと共に移転することになった。ときに昭和二十六年末、中途半端に生きてきた私たちの仕事場は常に中小企業で、倒産するか分からないような会社が多く、自らの

努力も足りなかつたことも含め、いくつかの会社を渡り歩いた。その中には、労働組合に潰された会社もあった。

昭和三十二年、縁があつて上岡玲子と結婚。それまで狭い一部屋で一緒に暮らした妹と別れた。妹には随分つらい思いや寂しい思いをさせて、兄として何もしてやれなかつたことが心苦しく、親に対しても申し訳なく思っている。子供は三人、千恵子、真理子、大介と充分な勉強もさせられなかつたが、それぞれ立派な配偶者を得て各家庭を築き、孫も七人、その成長が楽しみで何より嬉しい。

平成十四（二〇〇二）年四月、中学時代の友人と旅順、大連を五十八年振りに訪れ、旅順では楽しかつたことつらかつたことを思い、学校、寄宿舎に立ち寄ることを願つたが、軍の関係から立ち入りを禁止された。それでも明治からの戦跡は何ら変わらず、山は爾靈山、海は旅順港と、昔の姿そのまま私たちを迎えてくれた。大連はそれとは異なり、目を見張るばかりの近代都市と化していた。

平成十九年には旧満州よりの引揚者の団体で興安会という集まりがあった。その会で「訪中の旅」に参加する機会を得て、六十二年ぶりに住み育った索倫に行くことができた。年老いた私と妹で、「幻の街索倫」とその旅行記を書いたが、焼け野原と化し昔日の面影は全くなく、親切に街を案内してくれた中国人の元老教師さえも思い出せない長い長いときの流れを知り、感慨無量であった。父の最後と思われる場所にも行くことができて、それなりの満足感を得た。目にした大興安嶺は昔と何ら変わらず、名もない小さな川と共に自然の姿に大きな愛着を持った一日だった。臉に残る索倫の街を去るとき、父を思いこんな詩が浮かんだ。

待望六十二年 ようやく立てり異郷の大地

長久の和平成りて 山河静かなり

満天の星を戴き 聖地亦寂しからず

口惜しきは祖国に還る その志を絶たる

願わくば安らかに抱け 大興安の嶺よ

(長久の和平は父の戒名「長久院釈和平」より)

先に触れたが、父は旅順を訪れた帰り昭和二十年八

月十日索倫の状況は最悪で、避難する母と駅ホームで永遠の別れをし、同十二日街から馬で逃げたというが、その後「興安付近で死亡」と昭和三十二年ごろ北海道庁から通知があった。当時四十三歳であった。母は索倫駅ホームで父と別れ、最後の避難列車で満州を南下、そのまま朝鮮釜山より舞鶴を経て八月末に旭川に帰郷し、私たちを待っていたのであった。

八 終わりに

戦争は人類に対しての罪悪である。今も世界のあちこちで人の命が失われている。一部の指導者の名誉や面子のために行われているとすれば、甚だ迷惑この上ない。知覧を訪れたことがある。幾多の年若い兵たちが、特攻として人柱になっていった。名も無い島に取り残され餓死された方、靖国神社で会おうと散って行かれた数百万の英霊、広島、長崎で無残な死を遂げられた一般市民の方、空襲で焼け野原と化し各地で家族を失った方、外地で苦勞され還らぬ人となった方々、お墓にお骨もなく数知れない御霊が、「千の風」になって世界の空を「吹き渡って」いるかもしれない。

六十四年に亘る平和の時代に酔ってはいけけない。ときには、戦争で苦しんだ先輩たちのことを若い人に顧みて欲しいのである。私も七十九歳の年を経たが、お陰様で丈夫で生きている。忘れられない四組の両親があつたからで、実の両親をはじめ、敗戦時大連でお世話になつた長田夫妻、帰国後お世話になつた本家の大沼夫妻、そして妻の実家である上岡夫妻である。残念ながら皆さん亡くなられた。さらに加えるならば、結婚一カ月後に交通事故で左手の自由を失いながら私や子供たちの面倒を見てくれた妻、小さいときから喧嘩しながらも人間として生きる本当の苦勞を分け合つた妹、各地で触れ合い助けて頂いた大勢の人々に心から感謝し、折に触れ昔を思い起こす日々である。

